

授業で細かく子どもを見取り 一人ひとりに意味のある授業をつくる

高知県 高知市立介良潮見台小学校

「子どもが学びに向かわない」という課題に対し、子どもの実態の理解から研究を始めた高知市立介良潮見台小学校。研究授業では一人ひとりの学びの姿を追いつつ、次の授業に生かすことに重点を置くと共に、学校ぐるみで日常的に子どもの様子を共有している。

学校概要

児童数452人。18学級（うち特別支援学級3）。
教職員数は30人、20～30代が少なく、40代後半以降が中心と、平均年齢が高い。
*取材時（2010年3月）のもの

研究の方向性

- 「落ち着いた学習環境をつくりたい」という教師の共通の思いで研究を開始
- 子どもの実態を把握し、**子どもに寄り添い、考えや思いを生かした授業**を目指す

取り組みと成果

- 「授業研究部」「ケアリング研究部」「開かれた学校づくり研究部」を設置。多角的に子どもを捉える
- 指導技術ではなく、**子どもがどのように学んだかを付せんなどで丁寧に追い**、事後研究会で検討
 〉子どもの実態を踏まえた、子どもに寄り添う授業になる
- 課題のある**子どもの情報を学年を超えて共有**
 〉子どもへの理解が深まる。子どもにとっては、「見られている」安心感、自己肯定感につながる

成果を支える要因

- ある学年の子どもの変化により、研究の効果を実感。教師の意欲が高まる
- 校務を一役一人とし、研究授業時には子どもを帰宅させるなど、**教師が研究に集中しやすいようにする**

S c h o o l D a t a

◎教育目標は「心ゆたかに、学びあい育ちあう介良潮見台の子」。オープン・スペースを有効活用した実践に取り組む。開かれた学校づくりを目指し、家庭や地域との連携にも力を注ぐ。



校長 大石 格先生

児童数 396人 学級数 17学級（うち特別支援学級2）

所在地 〒781-5108 高知県高知市潮見台1-2602-1

TEL 088-860-2020

URL <http://www.kochinet.ed.jp/kerashiomidai-e/>

公開研究会 2010年度の日程未定

*2010年4月時点

◎課題と研究の方向性

「どうしたら学びに向かうのか?」
答えを探し続けた

介良潮見台小学校は、1998年に周辺の団地の新造に伴って開校した。現在のような校内研究に着手したのは2005年。当時は「高学年になるほど学習に向かわない」「教師の指示が子どもに届かない」といった課題に直面し、教師は皆「静かで穏やかな雰囲気」の授業をつくりたい」という思いを抱いていた。まず他校の取り組みを参考にしようと、学校規模が似ていて、子どもが落ち着いて授業を受けていると聞いた、神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校に約3年間、教師が代わる代わる訪問。授業見学や教師の話から学んだことを話し合い、自校の授業の在り方を検討した。

教材研究よりも 子どもの実態把握に重点

同校の校内研究の根底には、「授業がうまくいかないのは教師の問題であり、子どもに責任はない」という考えがある。授業の問題点を話し合ううちに、「最大の課題は、指導が子どもの実態に合っていないこと」という結論に至った。研究主任の近藤公枝先生は、次のように振り返る。

「子どもに寄り添った指導をしていたつも

りでしたが、『予定した内容を教えなければ』と思うあまり、一方通行の授業になりがちでした。そのため、子どもが授業の内容を理解できず、落ち着かないのだと考えたのです」

まずは子どもの実態を正確に把握する必要があると判断。子どもの思いや考えをくみ取り、それらを生かした手立ての構築を研究の柱に据えた。その土台には「どの子にもその子なりの理由がある」という視点があると、大石格校長は話す。

「例えば、授業中の発言はそれまでの経験が土台となって言葉に現れています。言動の背後にあるものを理解しなければ、教材研究に一生懸命に取り組んだとしても、指導は子どもの実態と離れてしまいます。まずは子どもへの理解が何よりも必要だったのです」

◎取り組みと成果

全員が三つの研究部の いずれかに所属

研究テーマは、「学ぶ意欲を育てる授業づくり・仲間づくり」。子どもの実態を教師がきちんと見取り、すべての子どもの学ぶ意欲を高められる授業づくりを目指した。子どもが互いの意見を聴き合える落ち着いた授業にしようと、サブテーマを「聴きあう教室づくり・思いやる集団づくり」とした。「高学年



高知市立介良潮見台小学校校長
大石 格 Oishi Haru
「一人ひとりが異なる生活環境にあることを忘れずに子どもと接したい」



高知市立介良潮見台小学校
研究主任。 「子どもにも先生にも、誠実に丁寧にかかわる。地域と学校をつなぐことも大切にしたい」



高知市立介良潮見台小学校
松本晶子 Matsumoto Akiko
授業研究部長。担任ではないからこそ、子ども同士や先生同士、クラス間などを「つなぐ」役割を果たしたい」



高知市立介良潮見台小学校
岡林宏枝 Okabayashi Hiroe
6学年担任。「常に謙虚さや感謝の気持ちを忘れず、子どもが安心して通える学校をつくりたい」



高知市立介良潮見台小学校
岡田浩幸 Okada Hiroyuki
5学年担任。「忙しくても、しっかりと子どもを見ることが大切。自分自身が学び続けることも忘れない」

の課題は、低学年の課題でもある」という意識も共有し、クラスの課題は担任だけの責任とせず、学校全体で一人ひとりの子どもを見取る体制づくりに着手した。

子どもの実態を多角的に捉えるため、05年度には「授業研究部」「ケアリング研究部」「開かれた学校づくり研究部」を設置。教師はいずれかの部に運営部員として所属し、部員を

つづけたくなる授業研究

中心としながら学校全体で研究を進める。授業研究部は、教科学習を担当する「A部」、総合的な学習の時間や人権教育を対象とする「B部」に分かれ、子どもの実態に合った授業の在り方を研究。ケアリング研究部はQ-U調査(*)の実施など子どもへの理解を深めるための研究を行い、授業づくりや生活指導に還元する。更に、子どもをしっかり見取るには地域や保護者の協力が不可欠と考え、開かれた学校づくり研究部が外部との連携に関する研究を担当する。

子どもにとって意味のある授業改善とするために、大きな役割を果たすのが研究授業だ。同校では、学校全体の研究テーマを踏まえた上で、教師それぞれが個人のテーマを設定する。授業研究部A部の部長を務める松本品子先生は次のように話す。

「自分の専門を更に深めたい、不得意教科を克服したいと、教師の課題意識はさまざまです。学級の課題を踏まえてテーマを設定し、他の先生から助言を得ようとする先生もいます。さまざまな研究を共有すれば、多様な気づきが得られるという利点もあります」

09年度は研究授業を9回実施。1回につき3人が授業を公開し、参観者を割り振った。事前研究会は行わない。「事前に指導案の指摘を受けると、授業者の授業ではなくなつて

事前研究会はせず普段の授業を公開

しまうからです」と近藤先生は話す。授業者の普段通りの授業を基に考えることと、時間や労力を軽減する目的がある。研究授業の日程、授業の担当教師、その学級を見る教師は、授業研究部A部が教師の希望に基づいて決め、授業テーマは授業を行う教師に任される。

子どもの様子を克明に記録

同校では、子どもをA層(理解が早い子ども)、B層(平均的な子ども)、C層(課題がある子ども)に分け、C層への指導に重点を置く。研究授業では、C層の子どもを中心に、子どもを見取るための工夫を凝らす。

1点目は、指導案の工夫である。指導案にはC層の日常の姿や支援について具体的に書く(図1)。担任以外の教師も、研究授業がその子どもにとってどのような意味を持つのかをより具体的に考えやすくするためだ。2点目は、授業観察の方法だ。研究授業では、授業研究部A部が役割分担を決める。教師の発問と子どもの発言を記録する記録係、写真係、C層の子どもを見取る教師など、さまざまな役割を受け持つように割り振る。学級担任は、A・B・C層から各1、2人をあらかじめ選ぶ。記録係は、その子どもの発言や教師の発問を受けた時の態度など、目

図1 指導案の内容と様式

①指導案の内容と様式

第○学年○○科学習指導案
2009年 月 日() 校時
年 組 名
場所
支援者

個人テーマ
1. 題材名
2. 題材の目標
3. 指導にあたって

4. 学習計画(全 時間)
5. 個人への支援

6. 本時の授業
(1) 本時の目標
(2) 本時の学習

*添付資料
・座席表(A・B・Cも記入・Q-Uの結果の位置を入れる)
・題材(学習するページ・ワークシートなど)

A: 理解が早い、意欲的な学習態度の子ども
B: 平均的な子ども
C: 課題がある子ども

研究授業で使う指導案のフォーマット。「個人への支援」の欄にはC層の子ども名前とその子の「実態」「課題」「育ちと学びを促すための工夫」を記入し、参観者が子どもの姿を捉えやすいようにしている



上記のシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/s0111/>

* 学級集団の状態を把握するための心理検査

に見える様子を細かく付せんに記録する。内面は見る事が出来ないため、子どもの行動を基に考えることを大切にしているからだ。子どもの見取りで中心的な役割を担うのは、C層の子どもを見取る係だ。また、役割が特にならない教師は、自身の気になる子どもを観察するように心掛ける。こうして書かれる付せんの数は、1時間の授業で50枚以上にもなる。

「授業をしていると、子ども一人ひとりの細かい動きには目が届きにくいものです。参観者が『この発問で身を乗り出した』『ここが分からずにあきらめた』といった子どもの行動を記録し、事後研究会での検討材料としています」（松本先生）

事後研究会は授業ごとに行う。模造紙に付せんを時系列順に張り、教師の働き掛け方や子どもの姿など気付いたことを話し合う（写真）。最後に全員で集まり、作成した模造紙を基に話し合いの結果を発表する。

「批評ではなく前向きな意見を述べ合います。授業者が研究授業をして良かったと思えることが、次の研究授業への意欲にもつながるからです」（松本先生）

子どもの言葉を大切にしよう

こうした研究授業を通じ、授業は子どもに寄り添うものになってきた。例えばある研究授業で「数人の子どもが指示の意味が分からず戸惑っていた」と、付せんに書かれたこと

があった。事後研究会では、「ポイントとなる指示語は授業の冒頭で確認しておくが良い」という手立てを皆で共有。更に、子どもに寄り添うことを心掛けるにつれ、自然と子どもに考えさせる授業になっていくという。

「教師の発話が減り、子どもが考えたり、ペアやグループで話し合ったりする時間が増えました。子どもの言葉を大切に、クラス全体で共有することにも重点を置いています」（近藤先生）

6学年担任の岡林宏枝先生（当時）は、自身の授業の変化を次のように感じている。

「子どもの内面にあるもの、例えば発言の内容やその背景にある子ども

の思いなどを捉え、『どうすれば自分から学びに向かうか』という視点で授業を考えるようになってきました。子どもとの信頼関係が重要だということも、強く意識するようになりました」

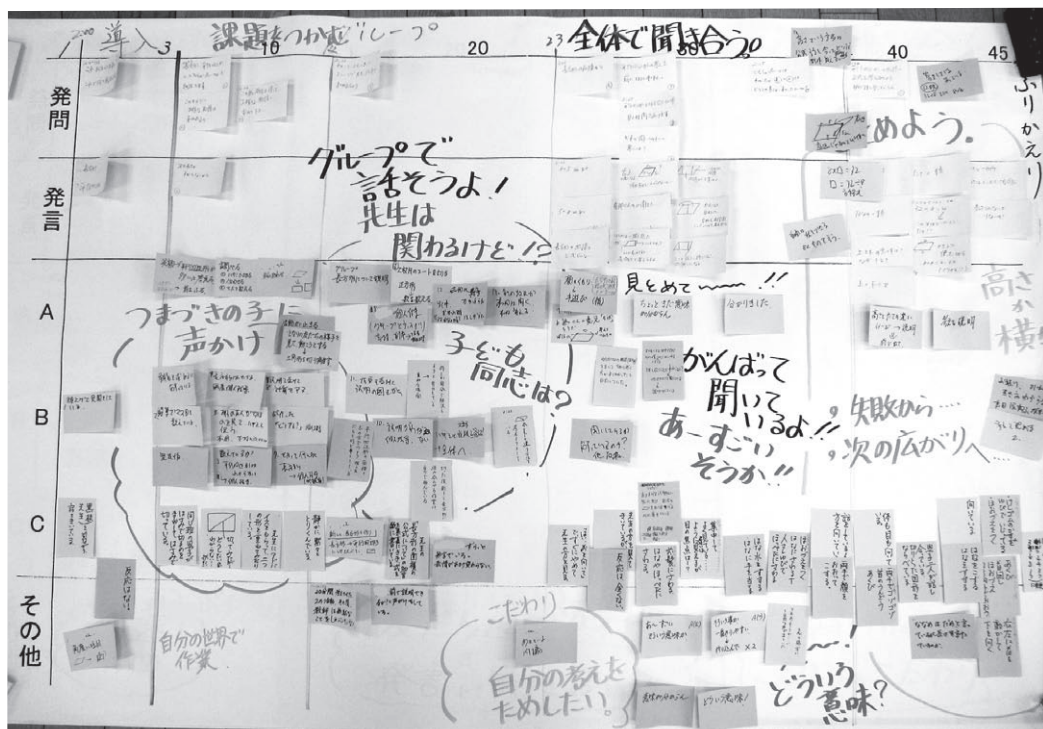


写真 事後研究会では教師の発問・発言、子どもの発言や態度を書いた付せんを左から右へと時系列に張り、これを基に話し合う。それぞれの学力層の子どもが発問に対してどのような反応を示したかが分かりやすい。会での発言は模造紙に直接書く

「どの先生も自分のことを知っている」

研究授業以外の場でも、子どもを見取ることを大切にしている。同校は教室や廊下に仕切り

つづけたくなる授業研究

のないオープン・スペースを採用しており、教師は日常的にさまざまな子どもと顔を合わせる。それを生かし、受け持ちでない子どもにも積極的に関わりを掛けるようにしている。また、子どもにかかわる話は、事務職員とも共有するために出来るだけ職員室で話す。

日常的な情報交換に加え、会議の場も設ける。学校全体で日常的に子どもをケアするため、ケアリング研究部が中心となり、週1回の「児童コーナー」という会議を行う。家庭環境や学習面に課題のある子どもの情報を共有する場で、教職員全員が参加する。5学年担任の岡田浩幸先生（当時）は次のように述べる。

「縦割り活動などの時間に、問題行動を見付けると、以前はすぐに叱っていました。しかし、学年を超えて情報を共有するようになってからは、自分の知らない理由があることが分かり、『なぜこんなことをしたのだからか』とまず子どもの事情を考え、気持ちを理解しようとする意識が生まれました」

授業内外で子どもの実態を把握することにより、校内の雰囲気は大きく変わりつつある。子どもは「どの先生も自分のことを知っている」「いつも先生から見守られている」という実感を持ち、それが自己肯定感につながる。教師は子どもをより細かく見取るようになり、授業の進め方が変わっていく。そのような指導が子どもの学習意欲を更に高めるとい

う好循環が生まれている。

◎ 成果を支える要因

研究の成果を教師自身が実感

研究開始から2年ほどは、授業の雰囲気はなかなか良くなり、多くの教師が「このような研究に意味があるのか」といった不安を感じていた。その雰囲気は、07年度に研究の成果が現れてきたことで大きく変わった。

「4年生の時に授業態度に課題があった学年が、6年生になると驚くほど落ち着いて授業を受けられるようになりました。卒業する時のある子どもが『3、4年生の時、もっと勉強を頑張れば良かった』と言ったのが印象的でした。子どもにとって授業が意味のあるものになっていることを実感し、それまでの苦勞が吹き飛びました」（松本先生）

大石校長は、「先生方は子どもの成長を実感し『もつと良くするには何をすべきか』と、更に意欲的になっていきます。つらい時期を共に乗り越える過程で、『チーム潮見台』を合言葉に教職員の団結も強まりました」と話す。

教師の多忙感を軽減

校務などの担当を一役一人として任せ、打ち合わせなどの時間を大幅に削減した。更に、以前は研究授業の時間は自習としていたが、

現在は毎週水曜日の午後の授業を無くして子どもを帰宅させ、5時間目にあたる時間を研究授業や職員会議として使っている。「気が散ることなく、研究に集中できるようにになりました」と近藤先生は話す。

目標であった「静かで穏やかな雰囲気の授業」は、研究の積み重ねが実を結び、ほぼ達成された。教師の導きにより、子どもが学び合う姿も見られてきた。今後は、子どもが「自ら」学び合う姿を目指して研究を進めていく。

大石校長が重視する

校長としての役割

私が大切にしているのは先生方への信頼感です。本校では一人一研究を行い、テーマ設定は個々に任せています。一人ひとりの自主性を尊重し、細かく指摘をしないように心掛けています。事後研究会でも先生同士の学びあいを重視し、校長として「答え」を出したりはしません。あくまでも同僚として発言し、必要があれば個別に伝えています。

ただし、担任と同じように子どもの姿を知っておくことは必要だと考えています。そうでなければ、他の先生と同じ土俵で話すことは出来ません。日頃から教室を回って授業を見たり、一緒に掃除をしたりして、子どもの実態を把握するようにしています。